

聞き所満載、「大丈夫、働けます」

ーダイバーシティシンポジウムを開催、300名の市民、経営者らが参加ー

連合北海道は7月26日、札幌市内で「多様な人材を積極的に活用しよう」「誰一人取り残さない」をテーマにダイバーシティシンポジウムを開催。労働組合員や経営者、障がい者・家族、一般市民ら約300名が参加した。

シンポジウムでは人口減少や働き手不足により、社会の持続性が問われる時代の中で、働き方改革、一億総活躍社会の実現、誰一人取り残さないための環境作りに向けて、障がい者など多様な人材の活用を図るためにどう環境を整えていくかなどについて、視覚障がい者であり、就労困難者の就労支援と雇用を創造するNPO法人の成澤俊輔理事長の講演や、障がい者を積極的に雇用している札幌市のトーワラダンボール(株)・大場勝博代表取締役から実践例などを聞き、それぞれの立場でどう取り組むかについて考えた。

■弱みは強み！

「多様な生き方、働き方」と題して講演した成澤俊輔さんは、自身の会社経営や障がい者雇用のコンサルティング等の実践を通じて、事例を紹介し、「どんな人だって社会と繋がられる、どんな人だって多様な働き方ができる」「字が読めない、人とのコミュニケーションが苦手という弱みは強みだ」等と、参加者に「大丈夫」というメッセージを送った。また、今回のシンポに参加して答えではなく、「こんなことができるかな、これから始めることができるかな」と様々な問いを持ち帰ってほしいと呼びかけた。



成澤俊輔さん



■障がい者を雇用することで働き方や生産性が向上

第Ⅱ部のトークセッションではDPI日本会議の西村正樹副議長をファシリテータに、成澤俊輔さんやトーワラダンボール(株)代表取締役で、北海道中小企業家同友会札幌支部障がい者問題委員会委員長の大場勝博さんが障がい者雇用の課題や、問題にどう向き合い取り組んできたか、障がい者雇用のメリットは何か等について実践を通じた経験談を紹介した。

1985年に18歳の知的・言語障がい者を雇用し、現在4名の障がい者を雇用している大場勝博さんは「地域に密着した地域貢献、社会貢献が無けれ

○主催者挨拶

連合北海道 出村会長

国連の「持続可能な開発目標(SDGs =エス・ディー・ジーズ)」の17目標のうち8番目に「働きがいも経済成長も」とある。2030年までに若者も障害を持っている人もデセントワークを実現しようという目標。今日のシンポではそれぞれの立場で取り組むに当たって、学習を深めたいいただきたい。



○開催地代表挨拶

札幌市 秋元市長

札幌は女性や障害者の就労が他都市と比べて低い。働き手不足と言われているが、多様な働き方について考えていかなければ人手不足も解消しないのではないかな。様々な立場の人たちがお互いに尊重しながら住みよい北海道、札幌を実現するために取り組んでいきたい。



ば企業の意義がない。地域の障がい者施設の入所者を受け入れたことがきっかけ」と述べ、「当初は社内で猛反対もあったが、徐々に社員も理解を示し、障害のある人たちへの理解ができる雰囲気醸成された」と当時を振り返り、障がい者を受け入れたことによって会社としてどのような強み、効果があったかについては、「不良品のチェックなどをしてもらっているが、安全・良質な製品をお客様に届けることができている。会社としては戦力になっている」と評価した。

この話を聞いた成澤さんは「障がい者など就労困難者が職場にいと、テキストだけの指導だったものが写真もあった方がわかりやすいとか、ギリギリに来ていたアルバイトが10分前に来るようになったなど、配慮や工夫が必要となる。今までは暗黙の了解でやっていたものが、言わないとわからない、社員同士でやるのが、最終的にはお客様にもできる。社員満足度から顧客満足度に発展する」などの自身の経験を基に、「お節介ができることがいいサービスができるようになる」と述べた。また、生産性と働き方の面では、「人は働いている時間の3割の無駄があるというデータがあるが5%しか下げられないという。残りの95%は同僚が下げることができる」と言われている。様々なセクションに就労困難者を配置することで、まわりが自分もガンバロウかなと考え、働き方や生産性が向上する」と紹介した。

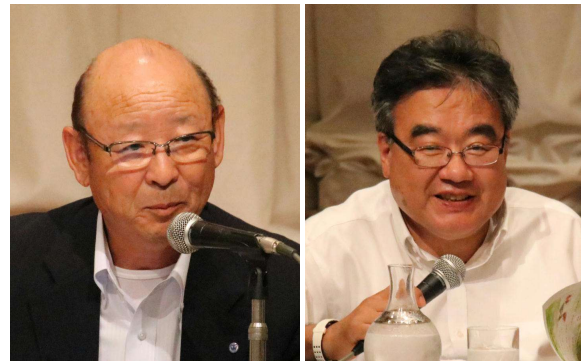
また、成澤さんは行政や経営者に対して、「障がい者や家族に配慮してほしいことは何か、苦手なことは何かと聞くが、だからダメなんだ」と指摘。「強みは何ですか、それが活かされる環境はなんですか」という問いに変わったら世の中前進したと思う。親にこの子の強みは何ですかと聞いても答えられない。働く点ではそっちの方が大事だと思う。当事者の周辺にいる人間が強みを求めていくこと、弱みばかり考えていると本人も家族も家にばかりいる。目覚ましが無くて起きられるとか、言わなくても新聞を取りに行ける程度でいい。強みを引き出していかねばいけない」と求めた。

この他、シンポジウムの合間には、SDGsを多くの人に知ってもらいたいと歌を作ったJICA職員の野吾奈穂子さんが「もっと輝く未来のために～Go for SDGs!」を披露した。

シンポジウムの閉会に当たり、後援団体を代表して北海道経済連合会の百瀬常務理事が「今年4月から障がい者雇用の法定雇用率も引き上げとなり、経済団体としても周知・啓発に努めているが、今後も行政、教育、労働組合、家庭と協力して障がい者雇用を推進していきたい」と締めくくった。

シンポジウム終了後には、事務局スタッフに泣きながら駆け寄り「参加して良かった」と言う方、家族の方からは「背中を押していただきました」と号泣して握手を求める姿が見られた。

連合北海道は今後も、人間が中心で誰一人取り残さない、誰もが生き生きと働ける社会、「働くことを軸とする安心社会」の実現に向けて取り組みを進めていく。



トーワラダンボール(株)代表 ファシリテータを務めた西取締役 大場勝博さん 村正樹さん



SDGs応援ソングを披露した野吾奈穂子さん